The Japanese Society of Pharmacognosy

書評

世界の顕微鏡の歴史／小林義雄著／B 5 判　224 ページ／定価　12,500 円（〒 500円）

菌類分類学の権威小林義雄博士が，今回顕微鏡について，その起りから20世紀初頭にいたるまでの詳しい調査をまとめられた．本書には日本へのルーツ，製作の年代や作者による顕微鏡の形の特徴，ヨーロッパ諸国における発達の過程，顕微鏡を用いての多数の研究成果および光源やプレパラートなどの付属品や引札などにいたるまで，その様子が網羅されていて，古顕微鏡発達史の全貌を知ることができる．

日本で使用されてきた顕微鏡は国立科学博物館の展示室に陳列されてはいるが，その種類は満足できる状態でない．著者は「関東大震災，今次の戦争，その他の機会に散逸または烏有に帰した顕微鏡を，落穂拾いで由緒を明らかにする．」と記され，日本各地に点在する大学や郷土博物館，寺院，医家や木草学者の家系に保存されているものを丹念に探られて撮写され，解説された．「ウルガン破天連…献ずる所の物 7 種，…芥子を卵の如く見る．」との南蛮寺興廃記をあげ，日本への渡来は16世紀半ばであることを示唆している．

ヨーロッパ諸国のものは大学付属博物館，科学博物館，顕微鏡発祥地や製作地などを数度にわたり訪問された結果の貴重な収録である．

実用品から象牙やべっ甲を使った豪華なものまで取揃えての写真の掲載で，文化遺産を顕微鏡を通して覗いたという思いがした．そしてまた，植物，病原菌などの解明の足どりも伝わる貴重な描画の挿入で，興味深く拝見できた．地球上の生物の実態が，日々に向上する現今のバイオテクノロジーと同じような速度で解明されてきたようで感銘深い．近代の産物と思い込んでいた双眼顕微鏡が，19世紀半ばに使われていたことを物語る写真も印象的．御苦労を重ねて満州から持ち帰られた顕微鏡のエピソードにも心を打たれた．

著者が足を運ばれたその場所へ旅し，見聞を広めた気分になれるこの書物，皆様方の資料としての重要性とともに，思を馳せる機会も得られるので，必見をお薦めする次第です．

（下村　裕子）

編集長　庄司順三
編集幹事　永井正博，伊田喜光
編集委員　糸川秀治，下村裕子，平賀敬夫，滝戸道夫，相見則郎，原田正敏，海老塚豊，西岡五夫（九州），ヒキノヒロシ（東北），三橋　博（北海道）

昭和60年3月15日　印刷　　昭和60年3月20日　発行

編集兼発行人	東京都練馬区桜台 2—30	庄司順三
印刷所	東京都文京区小石川 2—30—7	サンコー印刷株式会社
発行所	東京都文京区弥生 2—4—16	日本学会事務センター内 日本生薬学会
製作	東京都文京区弥生 2—4—16	(財)学会誌刊行センター

NII-Electronic Library Service